

野球の思い出



日本経済新聞に「私の履歴書」という超長期連続のコラムがある。我が家で日経を取り始めたのは昭和四十年半ばだったが、その頃すでにそのコラムは存在していた。大学時代の同級生だった佐賀出身の吉村久夫さんが日経産業新聞編集長をしていらした頃、雑談の折に紙面作りの話が出たことがあった。日経も一般紙のように最終頁はテレビの番組欄にしたいとは思いますが、「私の履歴書」は大切なコラムなので現状のスタイルは変えられないのだとの話で私も同感したものだ。とは言え全ての書き手のものを読んでいる訳でもないが、流石に名をなしている方々の自伝だけあって幾つか心に残っているものがある。

現在の筆者は元中日の投手杉下茂氏である。知

らなかつたことや懐かしい話に毎朝楽しく読んでいます。今でこそテレビのおかげでプロ野球も身近なものになっていますが、私の女学生時代の昭和二十年代には、まだまだ男性達のものだった。ホームラン王の天下、赤バットの川上くらいは聞いていたとしても、地方の一般の女学生には縁遠いものだったと思う。少なくとも私の故郷信州諏訪の友人の間では話題になることは殆どなかった。

私には二才年下の悪戯坊主の弟がいて、中学生ともなると大変なプロ野球ファンになっていた。ベースボールマガジンという雑誌を買っていて、私も覗き見をしていたので耳学問ならぬ目学問で結構選手についての知識を持つようになっていた。二階の表の部屋に床を並べて寝ながら、「野球二十の扉」などよくやった。「二十の扉」というのは当時のラジオの人気番組の一つで、「動物」「植物」などのジャンルを前置きした上で、回答者が質問する。答えはyesかnoで、二十問以

内にその答えを出さねばならない。

「その選手のチームは巨人ですか」「守備位置はファーストですか」・・・etc.

未だ一リーグ八球団の時代で、ラジオの実況放送に場面を思い描いて胸をときめかせたものだった。巨人の千葉のファウル連発や、志村アナウンサーの名調子も懐かしい。

学制が変わって、女学校が高校の併設中学となり、私は日本女子大の付属高校を受験、入学して西生田にあつた寮に入った。若葉の頃、早稲田の理工科にいた父の従妹の長男が六大学野球を見せられると言つて神宮球場に連れて行つてくれた。早法戦だった。法政の投手は関根で、彼のユニホームだけが奇麗にクリーニングされて白かつたところが印象的だった。ラジオで聞いているのと勝手が違つて、間合いが気の抜けたビールのように思えた。お弁当に気を取られて下を向いていると、どつと歓声があがつた。案内人の彼はサードの影

山がファインプレーしたのを見ていないとはと、残念があつた。

寮生活にも慣れた夏休み前の日曜日に、一人で後樂園に野球を観に行った。今はない太陽ロビンズというチームと中日の試合を見た太陽の投手は真田で、当時の名投手。中日はスタルヒン。一塁側の内野席に座つて、真田のウォーミングアップが間近に見えたのがうれしかった。思えば私はその頃から独立独行平気で見知らぬ所へも出掛けたものであつた

当時は食糧事情の悪い時代で、寮の食事だけでは栄養不足となり、寮生の間には脚気や胸を患う人が続出していた。いつもお腹を空かしていて、母の差し入れの小包が待ち遠しい日々だった。

戦後は好調だった父の商売も曲がり角に差ししかつていた。父母に経済的に大きな負担を掛ける割りには勉強の程度は高くない。大学から上京してもいいと思うようになった。そして私はその年

の十二月再び郷里の諏訪二葉高校に戻ったのだ
た。

しかし実際の大学受験には、母の母校だった日
本女子大学は受けずに、早稲田大学に決めた。本
当は東大に行きたかったのだが、女学校だった二
葉高校の受験体制ではとても及ぶところではなく、
問題集相手に一人頑張ってみたが成功はしなかつ
た。

しかし早稲田といえれば何といつても早慶戦であ
る。学生といえども早慶戦の切符は抽選である。
一年生には多い目に割り当てられるが、第一戦、
第二戦合わせて一クラス十五、六枚程度だったと
思う。私は第二戦が当たって、知り合った同級生
二人と地下鉄の神宮外苑で待ち合わせた。

当日の朝、私はドーナツを三個買って手提げに
入れた。外苑は大変な人出で、一塁側外野席の列
に並ぶ。ふと見ると一問ほど先にホームスパンの
上着を着た大きな男が、やはり大きな男と立って

談笑している。それが現在日経連載中の杉下だっ
た。すでに明治から中日に入っていて、大きく紙
面を飾る活躍ぶりであった。顔は赤銅色で、目を
細めて楽しそうだった。

球場ははちきれんばかりの盛況である。座席に
置かれたロープの内側は学生服を脱いでシャツの
白でWを描く。振り返ると角帽を被ったフクチャ
ンの特大の張り子が、手にしたWの旗をゆっくり
上下させている。同級の友人もいつか六人が集ま
った。女子は私の他にもう一人、それぞれ小豆色
の小旗を買って並んで座る。応援のグーツは早慶
戦の都度変わって、その後の試合に買わされた笠
や提灯などとともに暫くは私の部屋のアクセサリ
ーになっていた。

試合は慶応の投手藤田に翻弄されて、早稲田は
手も足も出ない。藤田が一際大きく見えた。鮮や
かな青と赤の縞を描いて座っている慶応応援陣は、
幼稚舎という付属の小学生がストライクの度に黄

色い声を一齐に張り上げる。

おかしなもので負けてくると、いくら応援団員が必死になつて音頭を取つても、がっかりして声が出ない。手提げのドーナツを出して、半分ずつ皆に分けてうつむいて食べた。それでも包み紙や新聞を小さくちぎつて紙吹雪を作つて握りしめていた。

試合終了。みんな自棄つぱちに紙吹雪を撒き、混雑する地下鉄を避けて、新宿まで歩きそこでそれぞれ分かれた。勝つていれば大騒ぎで繰り出す筈の道だった。そして思い起こせば、半分のドーナツを食べた後、ただ黙々と歩いただけの、まだ幼さの残つた素朴なその日が涙の出るほど懐かしい。

昨年末、鹿児島島の山形屋で早慶のOB懇親会があつて「紺碧の空」を思い切り声を張り上げて歌つた。

三年毎の早稲田同級会も鹿児島に来てからはな

かなか行けない。しかし鹿児島で年に一度でも慶応とエールの交換の出来る機会があるということ嬉しいことだ。何よりも夫と一緒に参加出来るということは掛け替えのない幸せなのだと思うのである。

(平成9年2月)